

# 初めてのCD-Romによる生成批評版の試み

——アラン・グーレによる『法王庁の抜穴』<sup>1)</sup>——

安 積 み づ の

## 1. 始 め に

2001年フランスで、アンドレ・ジッドの『法王庁の抜穴』の生成批評版がCD-Romとなって登場した。この作品は、ローマ法王が贗者であるという三面記事を題材にしたジッドの戦闘的作品であり、シュールレアリスト達に絶賛されたものである。ジッドはこれを自分の最後の「sotie 茶番劇」と呼んでいて、唯一の「roman 小説」である『贗金つかい』への橋渡しとして重要な作品となっている。このCD-Rom版を作成したのは、ジッドのテキスト研究の第一人者であるアラン・グーレである。発売早々、主だった文学雑誌、新聞がこぞってこのグーレの版を取り上げ、その偉業を讃えた<sup>2)</sup>。勢いこのCD-Rom版はもうすでに現在、ゾラやユゴーの生成批評版を準備中の研究者チームの手本となっているのである。本論文では、生成批評の研究分野におけるこのCD-Rom版の意義を問い、さらにこれが文学研究に開いた新たな地平を展望したい。

## 2. CD-Rom版作成の経緯

本論に入る前に、このCD-Rom版が完成されるに至った経緯を手短に紹介する。アラン・グーレが応じたインタビューによると、『法王庁の抜穴』の草稿研究は、彼にとって30年以上も前からのプロジェクトであったということである<sup>3)</sup>。それは彼がジャック・ドゥーセ図書館で『法王庁の抜穴』の草稿の大部分を発見したことに始まる。ジッドの一人娘であるカトリーヌ・ジッドが、

たいへん好意的にこのプロジェクトを後押しし続けたこともあり、時と共に、この最初のグループにいくつものたいへん興味深い断片が付け加えられていった。CD-Rom版による実現であるが、これは「アンドレ・ジッド・エディション・プロジェクト」の一環として制作されたものである。この協会は、1996年にシェフィールド大学フランス語科主任のデヴィッド・ウォーカーとゲーレが発起人であり、アンドレ・ジッドの文学作品の生成批評版をCD-Rom版で出版することを目的としている。このことについて、1996年8月のスリジー・ラ・サルの学会（「アンドレ・ジッドのエクリチュール」）で公に発表がなされた。こうして長い間ゲーレが育ててきた『法王庁の抜穴』のプロジェクトは受入先のシェフィールド大学に必要な資金と技術を見出すに至った。当大学は、CD-Romによる文学作品の出版プロジェクトを支援する大きな情報センターを有する。1997年には、望外の好機が訪れ、このプロジェクトがブリティッシュ・アカデミーの助成する全英七つのプロジェクトの中に入ることとなった。この助成の重要な点は、博士号を有する技術者の共同研究者が、このプロジェクト完遂のために3年間フルタイムでゲーレの指揮下において作業することになったことである。

### 3. 生成批評版

それではまず、本論文の中核ともなる、この生成批評版の定義から始めたい。この言葉はすでに日本でも、草稿研究の分野において、プルースト研究の吉田城や、フローベール研究の松沢和宏によって紹介されている<sup>4)</sup>『生成批評の初歩』を著したアルムート・グレジヨンの定義によれば、生成批評版とは「ある作品またはある草稿について保管されている生成過程の全資料を、印刷された形で、エクリチュールの時間の経過を追って提示する版」である<sup>5)</sup>。ここで既知の事実を詳述するまでもなく、このような版が生まれることになったのは、生成批評がその出発点を、実証的な源泉、草稿研究と、エクリチュール、テキスト理論など60年代後半以降の文学批評との両方に負っているからである。し

たがって生成批評は、伝統的な源泉研究とは異なるものである。具体的には、従来の源泉研究とは、文学作品の創造を作家の伝記的事実、文学史上の影響、当時の社会的事実などから説明するものであった。そして作家の到達すべき運命であった完璧な形であるという決定稿を、校訂版という形で提示するものであり、ヴァリエーションは不完全なものとして例証のために選択されて付け加えられるものでしかなかった。しかし生成批評版は、テキストとそれに先立つ生成過程資料自体のテキスト生産の事実を重視する<sup>6)</sup>。その中で書き直しであれ、削除であれ、加筆であれ、時間の流れに沿って生成の過程を忠実に追うことでそのエクリチュールを捉えるものである。決定稿から除外されるヴァリエーションも、一つの可能であったかもしれないものとして読み取り、言葉の豊かな可能性に満ち溢れた場所としての生成過程を提示するのである。

松沢和宏は、草稿が言葉の本質を体現するものとして、「言葉が自らの不断の更新を要請して止まないという生産過程を物質的に開示する草稿」と説き、生成過程批評においては、決定稿が究極の対象ではないことを論じている。「生成論は従来の草稿研究と如何なる点で異なるのであろうか。「…」「作品」とは完結したものではなく、それ自体言葉の無限の運動によって生み落とされ凌駕されるものであり、その意味では「決定稿」なるものも本質的には未完の草稿にほかならないとする点においてである。」<sup>7)</sup>

このような生成過程批評の背景には、文学作品自体の考え方の変化が存在していることが明白であろう。それは、テキストとは、不完全性、多声性によって特徴付けられるものであるとするポストモダンの考え方である。以来、吉田城が紹介するように、生成学はさまざまな批評傾向と合体して次々と成果を齎している。言語学、物語論、構造分析、精神分析批評、社会学批評、相互テキスト性理論などである<sup>8)</sup>

アラン・グーレによる『法王庁の抜穴』の CD-Rom 版においても、彼が全精神を傾けたのは、まさにこの生成過程自体の論理の追究である。彼は次のように書いている。

校訂版は、一般に刊行されたテキスト、つまり作家が見直し推敲した最後の状態を、越えることができない変更無用の完璧な最高傑作と見なすものである。それは作家が到達しようとしていた、また到達すべき運命だった傑作であり、そこでは先行した手稿の種類のヴァリエーションは、不完全な下書き、変更無用の決定版において極められた完璧な形へと向う下書きとしか考えられていない。「…」生成批評版は、作品の生成過程の進展を一步一步忠実に追おうとしているので、到達された作品のみが唯一可能なものであるとし、作家が始めから不可避免的に向ってきたヴァリエーションであるとする、目的論的幻想には警戒している<sup>9)</sup>

「目的論的幻想」とは、結果として生まれた決定稿こそが究極目標であったのだと予め定められていたかのように、この目標に達するべきだったからこの過程を辿ったのであると信じてしまう態度である。ではこの生成批評版はどのように実現されるのか。次の章ではその方法を問いたい。

#### 4. 『法王庁の抜穴』生成批評版の基本方針

アラン・グーレは、完璧な形の決定版のテキストという究極の目的なるものに、生成過程の資料を従わせることを警戒しなければならないと書いている。しかしながら、そもそも生成批評はこの作品なしには存在しえないのであり、グレジヨンも書いているように、大前提として、目的結果論的な生成過程資料の読み取り、分類、転写の作業が予め行われていることが必要となるのである<sup>10)</sup>。彼女は次のように言っている。

いずれにせよ、生成批評は、その研究の対象自体がちゃんと作り上げられていなければ、存在しえない。要するに、その対象を昇格させ世に出るようにした、エクリチュールのあらゆる働きの変化に応じて秩序立てられた全体として完成されていなければならないのである。エクリチュールが時

間によって方向付けられた活動ということもまた、疑いのないことである。「…」言語によるすべての生産活動のように、生成過程資料の中で見付かるエクリチュールや書き直しの行為は、このように連続性の法に従属している。「最も完成された」ものから、「最も不完全な」ものへ遡りながらその連続性を突き止めようとすることは、「…」後のあらゆる解釈に必要な前提条件である<sup>11)</sup>

それでは、いかなる方法で『法王庁の抜穴』の生成過程資料は構成されたのであろうか。アラン・グーレはベースになるテキスト、CD-Rom 全体の装置のレフェランスとなるテキストを選択する段階からもう、純粋な目的結果論に陥ってしまわないよう、生成批評版の目的に沿うよう心して周到な選択を行っている。それは初版と同時に、1914年5月にガリマール社から出版された最初の普及版である。彼は次のように説明している。

私が、初版よりも、『全集』の版よりもむしろこの版を選んだのは、すべての版とそのヴァリエーションをつぶさに調べた結果、この版が全部の中で(すべてが多かれ少なかれ誤りの見られる、疑わしいものなのだが)最も不完全なものであると判断したからである。そしてこの版が、ジッドが自分の「茶番劇」に望み、検討を行った、加筆訂正と仕上げの仕事の成果を代表するものだと思ったからである<sup>12)</sup>

そしてレフェランスのベースを作るために、この版を『法王庁の抜穴』の「第一の書」から「第五の書」に分け、各書ごとにその中のすべての段落に通し番号を打つことになったのである。しかしながらこの1914年版がいかに加筆修正の多い版であるとはいえ、線状的で均一化されたテキストへと単純に準拠することに対し、グーレは警戒する。彼の講じる対策は、一方で生成過程の全テキストにおいて生成の論理を追い、もう一方でその論理を CD-Rom 上で展開

することである。具体的には彼は、一方で「集めることのできた生成過程の資料をすべて同等に考慮に入れること」、「事前にそれらを序列化することなく、始めからそれらの行く末を考慮に入れることなく、各瞬間にそれぞれの訂正、加筆、削除、置き換えを司ったかもしれない論理を追うために、それらを最大限厳密に転写すること」に注意する。そしてもう一方で「作品の進展を固定しない、またさらに危険なのは始めから視点を捻じ曲げ、選択を押し付けるような技術的な仕掛けのせいでその進展を硬直したものにすることであり、それを避けること」、「不可避のコースを決め付けるような、一大プログラム作成装置のコースの鋳型に生成過程を流し込むことを避け、分りやすく、総括的で、そしてまた柔軟である私たち独自の分類のシステムを創設すること」<sup>13)</sup>を目指す。

## 5. 生成過程の資料とその分類

ここでは、具体的に、ゲーレが自由にすることのできた生成過程資料を挙げながら、彼による分類と転写の問題を考えてみよう。

彼のインタビューと CD-Rom 作成過程の報告論文をまとめると、彼が当たったのは、まずテキストの執筆前段階における準備資料である<sup>14)</sup>。これは、新聞の切り抜き、その場の閃きに任せて手帳のページに書き取ったちょっとしたメモ、構想、シナリオ、登場人物や典型についてのメモである。それからテキスト執筆時における下書きである。これは、たいていがよく練られた初稿であり、様式や紙質やインクや筆跡の違った異種混交のものである。この執筆の時期はかなり長い期間にわたり、主要部分が 1911 年春から 1913 年 6 月の 2 年間に書かれていても、全期間としてはおそらく約 15 年にはなる、いくつかの時期にまたがるものである。全体的には執筆順序を判別することも、大部分が、質、大きさ、様式の異なる紙に提示される種種混合の資料の日付を確定することも不可能なものである。そして次に、手稿である。これが決定稿となるテキストを確立し、集大成の中心細胞を成すとも言えるようである。なぜなら、本全体がそこで構成され、連続した形で作り上げられるからである。これは一見したと

ころ「決定稿」と推定されるが、おうおうにして手稿の清書のために手直しされている。さらには、タイプ稿の存在したことの手掛かりとなるものがある。これは、全くと言っていいほど無くなってしまっているが、番号の入った一部のページが残存している。すなわち、タイプ打ちの2ページと、手書きの清書の39ページ、その中には、妻のマドレーヌ・ジッドの手になる清書がある。手稿の最後に来るのが、初版の出版前に雑誌に発表されたものの校正されたゲラ刷りである。これはジャック・リヴィエールが大切に保管していたもので、『*La Nouvelle Revue Française* 新フランス評論』で1914年1月1日から4月1日に出版されたものである。最後に、諸版の歴史へ移ってみると、当初の出版物がある。つまり、雑誌中の前出版、初版、最初の普及版である。この1914年の最初の普及版は、集大成の到着点であり、グーレが本になる版として選んだものである。

このように列挙してみると、グーレが生成過程資料を分類しようとした時に直面した困難がすぐに理解できよう。彼が望んだように、究極目的なる最終稿のテキストの側から生成過程を説明するのではなく、生成過程の各瞬間の論理を追うのであれば、生成過程について、経過など時間の情報が必要なのである。ジッドが『法王庁の抜穴』を着想してから下書きを重ね、執筆されたものが出版されるに至るまでの経過はどのようなものであったのか。グーレの資料紹介の中で、日付が明らかな当初の出版物はさて置き、問題となるのは彼自身が言っているように下書きであった。彼が自由に使うことができた下書きの661葉は、主として4つの源から来たものである。つまりパリのジャック・ドゥーセ文学図書館から313葉と99葉の別々のグループ、ジュネーヴのコロニーのボドメール図書館から133葉の一まとまり、カトリーヌ・ジッドが所有する4冊の学習ノートまたは下書きの束、フランス国立図書館の『狭き門』の手稿に属する12行程の2葉である。これらの草稿は、蔵書の場所が分散していて、日付の確定が不可能であるという難題を抱えている。正確な日付が分からないとなると、書かれた日付順に草稿を並べて、生成過程の時間の流れを追うこと

はできない。それでもある程度は、草稿を綿密に解読しその内容によって内部の順序を見て取ることが可能である。グレジヨン<sup>15)</sup>は、地の文と書き込みの文との前後関係や、シナリオの文体と物語の文体との前後関係など、明らかにすることのできる例を挙げている<sup>15)</sup>また草稿内部の時間は、外から、作家の日記など別の書かれたものによる証言でいくらか推定することもできる。例えば作家が読書によって得うるさまざまな知識が、テキストの流れを変えている場合、そこから日付を割り出すことができる<sup>16)</sup>しかしながら、『法王庁の抜穴』の下書きについては、その下書き全体の内部の順序立てを行うことがある程度可能であっても、同じ内容の二つ以上の断片について、どれが初筆なのかを断定することができないということがある。特にここで厄介だったのが、主な下書きの蔵書が四箇所に分かれていたことである。グーレはそのためによく観察できなかったことを列挙しているが、その中には、この生成過程の問題の根幹に関わるものがある。例えば、その最初の着想がいつに遡るかという疑点で、これが1907~1908年の『狭き門』執筆時に遡り、ラフカディオの「無償の行為」が中心にあったかもしれないこと、また主な蔵書の間でどれが最も古いものなのかという疑点で、それはボドメール図書館のそれではないかということ、さらには、主要人物に関わる疑点で、ラフカディオの事件以後、きわめて重要な役割を演じる彼の恋人ジュヌビエーヴは最終的に付け加えられたのではないかということなどである<sup>17)</sup>

次に分類された資料の転写の方法であるが、転写には大きく、線状転写と公文書学的転写の二つの方法がある。グレジヨンによれば、線状転写とは「印刷されたテキストのページの物質的側面を再現する」もので、公文書学的転写とは「手稿のエクリチュールの物理的な側面を重視する」ものである。グレジヨンは、公文書学的転写を一般的な原則として採用している<sup>18)</sup>それはある専門家が解読したものを、他の人が労せずして読めるようにすることが転写の使命だからである。さらに望ましいのは、「向かい合わせにして、片方では見せるためのファクシミリが、もう一方では読ませるための転写が提示されるような重



宝する資料」である。転写はあくまで研究の道具として価値あるものでなければならぬのだから、読みやすさと言っても、テキストそのものに代用される必要はないのである。したがって、「網羅と精確さの原則」は厳守されなければならない、それをしばしば線状転写が犠牲にしていることは論外である。グーレは、可能な限り公文書学的転写を行いながら、線状転写の方を選んでいる。しかし、グレジヨンが勧めるファクシミリと転写が向かい合わせに提示されること、また線状転写が陥りがちなオリジナルの削除はないということを付け加えておかなければならない。

## 6. 紙から電子へ

グーレはそのインタビューの中で、彼自身 1996 年までは、下書きのファクシミリをマイクロフィッシュによって見せることで補う、紙の出版を考えていたことを述べている。そしてその時には、すべてを網羅しようと想像することすらできなかったということである。これまでの生成批評版はたいてい紙によるものであったが、紙の容量の限界ははっきりしている。グーレによる CD-Rom 版の構築について論じる前に、ここではこれまでの生成批評版について概観し、CD-Rom の有利な点をさらに詳しく調べてみる。

グレジヨンによれば、これまでに、元のままの形で手稿を読ませるものとしてはファクシミリ版が存在し、成功を収めている。例えば、1957 年から 1961 年に出版されたヴァレリーの『カイエ』29 巻である。厳密な意味での生成批評版については、グレジヨンは理想的にはすべての生成過程資料のファクシミリと転写が向かい合わせに提示され、注やイントロダクションがあり、転写は公文書学的転写が望ましいとしているが、現実には様々であった<sup>19)</sup>。彼女は、理想の版が多くの場合、物理的に便利が悪い例を挙げている。詩や物語のような短い作品には理想の版が可能であるが、長い作品は一部を選択しなければならない。例えばジョヴァンニ・ボナコルソによるフローベールの『純な心』では、印刷されたわずか 30 ページの短編が生成批評版で 700 ページを占めることか

らも分かるように、このような版はかなりのボリュームになってしまう。長編の作品では、ジャンヌ・ゴルドンが『ボヴァリー夫人』のある一場面を選択して、資料の公文書学的転写を出版している。一方でボリュームを減らそうとして線状転写にすると、夥しい数の位置・弁別記号に頼らざるを得ず、転写が混乱したものとなり、読む気を挫けさせる。他方でより手軽に公文書学的転写とし、ファクシミリを向かい合わせに足すなら、さらに多くの巻が必要となる。これらの製本された版は、それだけでも明らかに取り扱いが容易でない。生成過程のいくつかの異なった段階を並行して読む場合は、簡単に行ったり来たりすることはおろか、それらをさらにファクシミリと転写の形で自分の周りに置くことなど不可能である。例えばヘルダーリンの全集は20巻にも上るのである。グレジヨンはそのように言っている。「不可分的に二次元のものであり、本というのは、生成過程に固有の動きを再現するのに不向きである。「…」学術的校訂刊行者は、生成過程の時間という、この第三次元を厳密に表示することはできない。」そして彼女は、「紙の出版は限界に達している」という明白な事実から、「支持体を変えなければならない」<sup>20)</sup>と結論している。

## 7. ハイパーテキスト

そこで登場したのが電子生成批評版である。グレジヨンは当時のハイパーカードという技術革新について次のように言っている。「ハイパーカードの発明は、実際、10年前には敢えて夢見ることすらしなかったような、生成版の問題解決策を齎した」。彼女はハイパーテキストが「生成過程に決定的な次元である第三の次元、つまり時間の次元を付け加える」とし、次のように結論している。

「ハイパーカードによる生成批評版の革新的な点は、まさに二次元性の永遠の障害を無化し、初めてエクリチュールの力動的イメージへと道を開いたことである。「…」奇妙にも、生成批評の大きな賭けを、最もよく際立たせ、とうとう顕在化させたのは、理論の枠組みではない。折しも登場した技術革新が、一挙に書かれたものを画面上に移動させ、固定された筆跡が再び書く行為になる

ように動き出させ、テキストの無数の空間を限りなく動き回らせることを可能にしたのである。]<sup>21)</sup>

ハイパーカードの基づくハイパーテキストの概念とは、ジェラルド・ジュネットが物語分析において練り上げてきた「イペルテキスト」の概念とまったく一致している。ジュネットは「イペルテキスト性」について、「これは、あるテキスト B（これをイペルテキスト hypertexte と呼ぼう）を、注釈のそれではない仕方でそれが接ぎ木されるところの先行するテキスト A（もちろんこれはイポテキスト hypotexte と呼ぶことにする）に結び付けるあらゆる関係なのである」]<sup>22)</sup>と言う。情報工学者達の呼ぶハイパーテキストは、これらのテキスト間に存する関係をパソコン上で結合し、すぐに参照できるようにするシステム、またはテキストのことである。<sup>23)</sup>

ハイパーテキストによって、生成過程資料の資料を全部入力することが可能になる。まずはレフェランスのベースとなる本文テキストデータを収集入力し、そしてイメージの入力という性能を活かし、手稿のファクシミリを入力するのである。また転写や注釈など校訂者の読解も付け加えることができる。<sup>24)</sup>

このようにハイパーテキストは、メモリー容量の増大によって生成過程の全資料を選別することなく紹介することができる。またリンク間を容易にジャンプすることによって、生成段階の異なった段階を簡単に移動しながら読むことができる。さらに多ウィンドー化によって同じ画面上でファクシミリと転写、もしくはいくつかの段階の資料を同時に観察できる。<sup>25)</sup>

フランスではハイパーカードを使った最初の生成批評版に、ジャン＝ルイ・ルブラーヴが、フローベールの『エロディアス』の冒頭について最初のシナリオから清書された写しまでを集成した版がある。冒頭という限られた範囲であれ、これはたいへん魅力的な試みと言えよう。生成過程のあらゆる段階における資料が保存されているフローベールであれば、なおさらである。私たちはフローベールの筆の先に生まれつつあるテキストを目の当たりにし、彼の代わりに別のテキストを書いてみることもできる。ルブラーヴは次のように言っている。

『エロディアス』の生成過程において、フローベールはテキストと視覚の要素を組み合わせながら、マルチメディアのデータベースを作るのだと考えよう。このベースを読んで恰好の断片を選び抜いてはメモを取るという活動は、その抜粋した断片の関係の網目を作り出すことによって、ナビゲーションの体系を構築していくことになる。この航程を作り出す仕事に伴って、さらに抜き出したテキストの徹底した書き直しや言い換えがなされ、それはいわゆる執筆まで続き、最後の清書で終わりとなる。

手短かに言えば、フローベールが調べあげた資料全体と、彼が心血を注ぐメモを取る活動そのものを、ナビゲーションのシステムを備えたハイパーテキストと考えることができよう。このハイパーテキスト中の往還によって新しいテキスト、つまりコントの冒頭が生成される<sup>26)</sup>

## 8. 『法王庁の抜穴』のCD-Romの構築

それでは、ハイパーテキストを作成するために、テキスト間の様々な要素を挙げ、それらを関係付け、階層分けする作業はどのようなものだったのか。グーレのCD-Romの構造が可能にするリンクと参照のシステムはどのようなものなのか、ここで見てみたい。

本論文第4章において述べた、『法王庁の抜穴』の生成批評版の基本方針の中で、グーレが生成過程のエクリチュールの論理を重視しながらも、レフェランスのベースを1919年の普及版にしたことを述べた。そしてこの版が、「第一の書」から「第五の書」に分けられ、各書ごとにその中で始めから終わりまで一つ一つの段落に通し番号が打たれたのであった。その結果として、このCD-Romのハイパーテキストはまず第一に、テキスト本文の四段階、つまり基礎テキストの1914年普及版・雑誌中の前出版の1914年1月～4月『新フランス批評』版・手稿・下書きの四段階の間を自由にナビゲーションできるものとなった。このようにして、「羅針盤」<sup>27)</sup>のような「Sommaire 目次」(Fig. 1)からテキストへの航海は始まる。この「目次」の中の「Bibliographie 文献目録」をク

リックすると生成過程資料のモジュールが開かれ、その時すぐに画面左側に現れるのは、レフェランスのベースとなる 1914 年の普及版である (Fig. 2)。メニューバー (Fig. 3) からは「Ed. 14 14 年版」をクリックすると、四つの階層である基礎テキスト・雑誌中の前出版・手稿・下書きが選べる。またメニューバーを右隣の「L. n 第何書」と「Ch. n 第何章」へ移動すれば、「第一の書」から「第五の書」まで行きたい「書」へ、そしてその中の行きたい「章」へすぐに行くことができる。グーレは、テキスト本文の並置・対照のこのシステムから除外された資料の存在について言及している。すなわち「Documents préparatoires 準備資料」(Fig. 1) の名のもとに集められた、新聞の切り抜き・引用・構想・シナリオ・様々なメモであり、この中には校正刷りの上で削除された序の草案も入っている。これらの主要な資料は、独立して置かれることで、



Fig. 1 目次

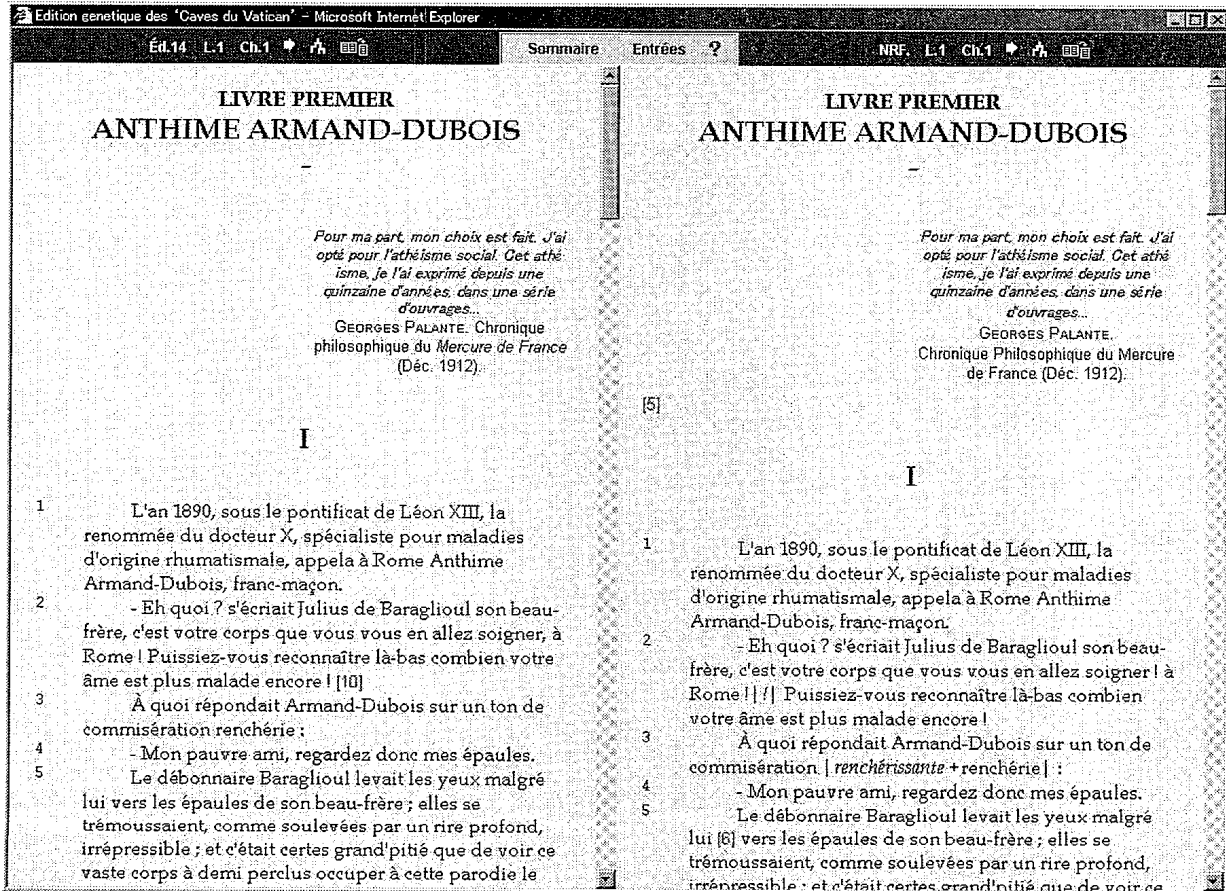


Fig. 2 テキストと生成過程資料

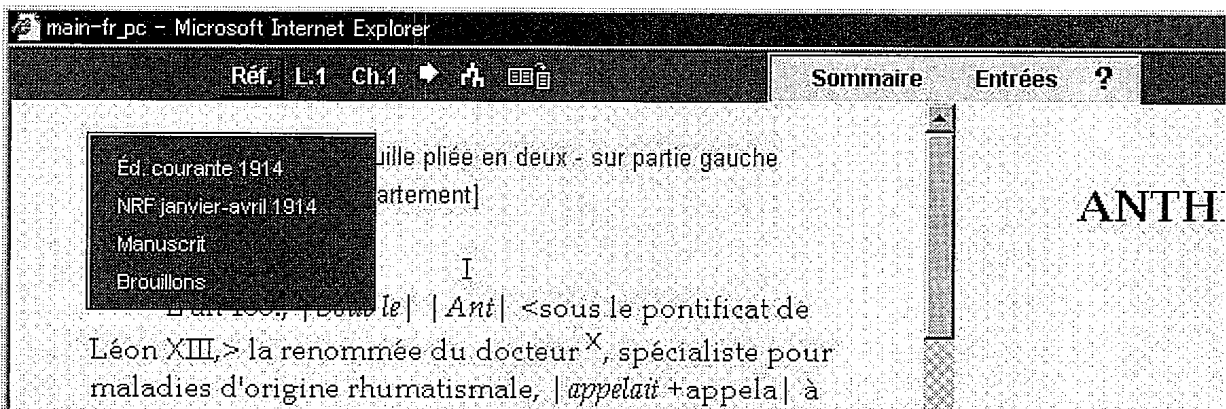


Fig. 3 メニューバー

後の自由な読みに開かれることとなった<sup>28)</sup>

さて CD-Rom の下部構造を構築していく上でもやはり難しかったのが、生成過程の資料を分類する際に困難であった下書きの問題である。600 葉を超え

る資料の中でユーザーが迷わずに動き回るにはどのようにしたらいいのか。グーレは下書きからハイパーテキストを作るために、まず何より、下書きの生成過程自体の論理を重視し、その再構築を望んだ。卵が孵化するまでの胚の成長を日を追って観察できるように、私たちの目の前で作品の生成過程が展開されるなら、それは興味深いことに違いない。しかしながら、生成過程において日付の確かな情報が得られないということが、この仕事を困難なものにする原因となった。最初にグーレは、削除されたり移動させられたりした文章を補いながら、冒頭の数章について各章ごとに、推定される執筆の順を追ってフォルオを分類した。次にそれに従って、生成過程の論理に適うように、「予備執筆」・「第一執筆」・「第一執筆の加筆修正」・「第二執筆」・「第二執筆の加筆修正」の五段階の分類を各章ごとに行った。ところが、章から章へと、執筆の時期、推敲の量には大きな隔たりがあり、この五段階という硬直した階層分けは失敗に終わった。ここで Fig. 4 と Fig. 5 に見られる隔たりを比較されたい。また全体のメニューの展開で、これら作成された五つのテキストの階層が、独立したものとして現れるうえに、これらの階層の内部では、異質なものが相次いで出てきて、その連続するものの内容の一貫性については、なんら正しい一貫性とは言えなかった<sup>29)</sup>

それで彼は半年後に下書きの構築をやり直すのだが、その時には生成過程の段階を追って作品の姿を提示することは諦める。そして印刷された決定版に添って、可能な限り連続するテキストとなる基のヴァージョン、換言すれば「レフェランス・テキスト」を、下書きの紙葉によって構成した。その基準のテキストから発して、前後に執筆された紙葉が、それぞれのシーケンスの推敲の有無、多少の差はあれ、呼び出せるようにした。つまり、もはや展開するメニューからではなく、順に「予備執筆」、「前執筆」、そして基準のテキスト、最後に「後の執筆」と四段階の中で、コマンドによって横から、一葉一葉、前のものであれ後ろのものであれ呼び出せるのである。下書きは最終的には、生成過程の時間の階層ではなく、各シーケンスの推敲の発展が、階層として樹系図

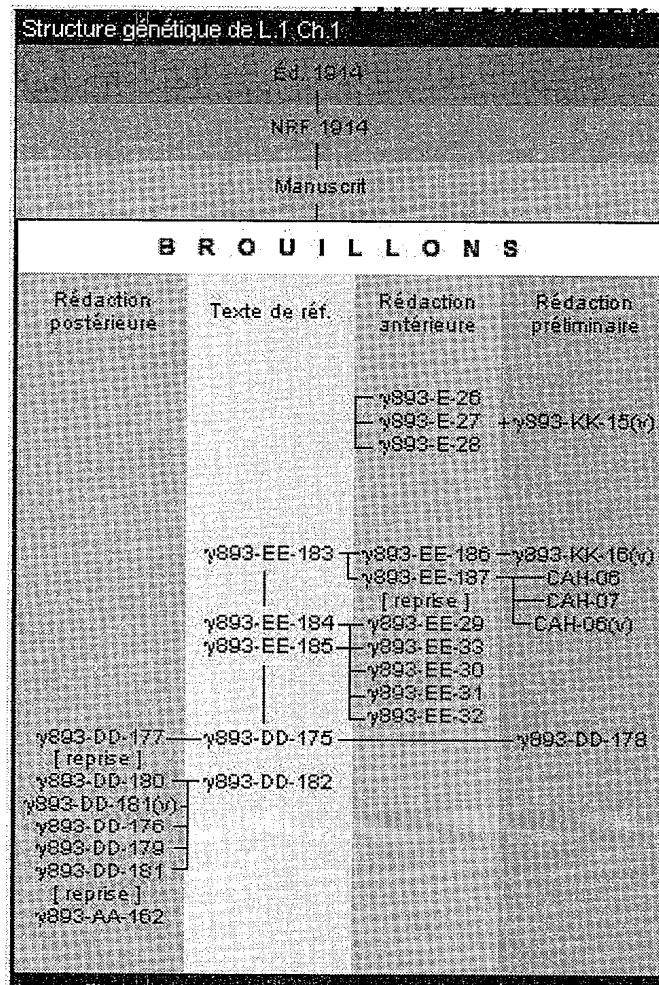


Fig. 4 下書きの一覧表 (推敲の多い例)

のような「一覧表」に示されるようになったのである。これは、各章の生成過程資料の構成を視覚化するものであり、CD-Rom の使用者は、その章の下書きの全構造の中で、自分が調べているフォリオの位置を知ることができるのである<sup>30)</sup>

このようにして、ハイパーテキストは、テキストの構造化と、テキスト全体の把握を可能にした<sup>31)</sup>。テキスト全体は四段階の階層として並置され、1914年版の各書・各章・各段落による照合ができ、下書きについては、なおかつ一覧表によって複雑な生成過程が樹系図的に構造化されていて、目に見えて参照できるようになっている。さらにテキスト内部では、グーレによる目録から、詳しくは、シーケンス・登場人物・対になった人物・テーマ・場所・注・ファ



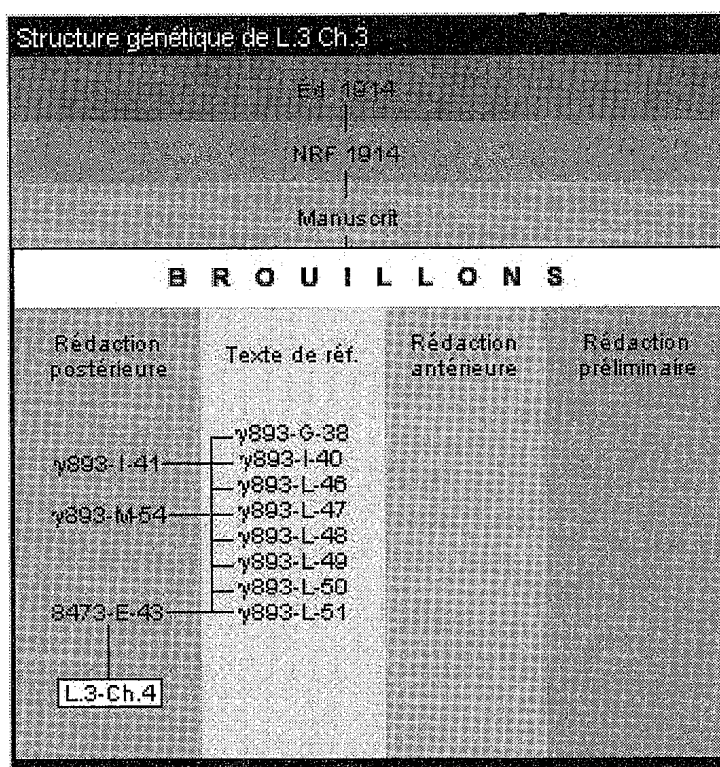


Fig. 5 下書きの一覧表 (推敲の少ない例)

クシミリ・単語・コードの階層から、該当する情報を呼び出すことができる。

このように作られた CD-Rom は、私たちに「あらゆる方向に資料を読む」<sup>32)</sup> ことを可能にすることだろう。生成過程資料はその時、最終稿の線状性な秩序ではなく、複数の可能性に横断される無秩序を証明するに至るだろう。

## 9. 終わりに

手稿の歴史の上から、このような生成批評版がジッド研究者の手に届くようになったことは画期的なことである。これで彼のテキスト生産をさらに克明に分析できる。また、ジッドの研究者のみならず、他の作家の生成研究をしている研究者達、そしてまず生成研究者達がこのような版を手にする事で他の作家の生成過程と比較検討することができるだろう。その上で初めて生成学が成り立つのである。生成批評の視点においては、この CD-Rom 中に読むことができるのは、生成過程のいくつかの段階におけるテキスト同士の異同だけでは

ない。これまでテキストとして私たちが簡単に読むことのできたいくつかの版に、この生成過程版が加わったことで、決定稿のテキスト自体が読みの変質を迫られることも可能になった。また、『法王庁の抜穴』の主人公ラフカディオが、『贗金使い』の生成過程の記録である『贗金使いの日記』冒頭では、この小説の主人公として予定されていたことから分かるように、ジッド自身の作品間の相互関係もさらに解明されるだろう。さらには、他の作家の引用などによって、テキスト生産の場において作品の相互干渉を読むことができよう。バルトはジッドの作品全体が「一張りの網を成しているので、一つの編み目も漏らしてはならない」<sup>33)</sup>と言った。このCD-Romは、ジッドの作品の内部に留まらず、他の作家の作品との関係においても、その相互テキストの網を生成過程の段階から明らかにすることを可能にするのである。

今度は私たちの読みが待たれている。確かに、ハイパーテキストは読者による自由な読みとその上に「書くこと」も可能にしたテクノロジーであり、<sup>34)</sup>それはこのCD-Romには不可能である。しかしながら、このCD-Romの生成批評版が可能にする読みの射程は大きい。この点において生成過程資料は「静的な本」であることを止め、「動的な本」となることができるのではないだろうか<sup>35)</sup>

サルトルの作品の生成批評版を手がけたミシェル・コンタが、『ル・モンド』の中でこのCD-Romに次のような賛辞を贈っている。

「大学生、研究者、老練な読者」とケースに言及されているが、これは本当はあまりにも限定されすぎたものである。このような版は、テキストの「製法」に対してますます増大している読者の興味に応えるものであり、より広い読者の輪を拡げることができる。「…」さあ、招待状が届けられたのだ。生成批評版のひとつのお手本の中で、縦横無尽に、ハイパーテキストの旅程、テキストとファクシミリの間に張られたリンクの旅程に従ってナビゲーションするという招待状が。この迷宮の中には矢印はあっても、それは命令なんかではない。ここでは誰もが何ものにも妨げられるこ

となく、自分の解釈の航程を進んでいくのである<sup>36)</sup>

## 註

- 1) GOULET, Alain. *Édition génétique des «Caves du Vatican» d'André Gide*. Sheffield, André Gide Editions Project / Université de Sheffield, NRF Gallimard, 2001. この CD-Rom を始め、ガリマール社の文学関係の CD-Rom 配給元は次のものである。配給元 le C. D. E, 電話 01. 44. 41. 19. 05. コードナンバー le code du CD-Rom : A79716. 住所 26 rue de Condé, 75006 Paris.
- 2) この CD-Rom についての書評は以下を参照。Valérie Marin La Meslée, *Magazine Littéraire*, octobre 2001, p. 10. Myriam Boutouille, *«Les dessous de Gide»*, *Lire*, novembre 2001, p. 30. Michel Contat, *«Les souterrains des “Caves du Vatican”»*, *Le Monde [des Livres]*, vendredi 7 décembre 2001, p. III. Tom Reisen, *«Visite guidée des Caves du Vatican»*, *Livres/Bücher*, supplément du *Tageblatt*, An 6, N° 11, 21 décembre 2001, p. 23. *«Les Caves du Vatican revisitées par Alain Goulet»*, *Livre/échange*, n° 18, février 2002, p. 9. [article anon., avec photo] *Ouest-France*, 1<sup>er</sup> avril 2002 : *«“Les Caves du Vatican” sur CD-Rom»*. Andrew Oliver, *Revue d'Histoire littéraire de la France*, juillet-août 2002, 102<sup>e</sup> année, n° 4, p. 663-666. Daniel Ferrer, *Genesis*, n° 18, 2002, pp. 163-166.
- 3) Interview d'Alain GOULET, réalisée le 17 novembre 2001 par Thomas REISEN pour le supplément *Livres/Bücher* du *Tageblatt*.
- 4) 吉田城「テキストの生成学——プルーストの手稿をめぐって」『文学』第 56 号, 1988 年 9 月, 24-36 頁。松沢和宏「『感情教育』草稿の生成論的読解の試み——恋愛の物語と金銭の物語の〈間〉——」『文学』第 56 号, 1988 年 12 月, 42-66 頁。
- 5) Almuth GRÉSILLON, *Éléments de critique génétique. Lire les manuscrits modernes*, Paris, Presses Universitaires de France, 1994, p. 243.
- 6) ジャン＝ベルマン・ノエルはこれを「先行テキスト」と呼んでいる。彼によれば「先行テキスト」とは、「テキストに先行するものを、批評家がある特定の方法論で、最終的な所与に続く読解の対象として再現したもの」のことである。Jean BELLEMIN-NOËL, *«Reproduire le manuscrit, présenter les brouillons, établir un avant-texte»*, *Littérature*, numéro 28, décembre 1977, p. 9.
- 7) 松沢和宏「『感情教育』草稿の生成論的読解の試み——恋愛の物語と金銭の物語の〈間〉——」43 頁。
- 8) 吉田城「テキストの生成学——プルーストの手稿をめぐって」29-30 頁。
- 9) Alain GOULET, *«Comment concevoir et organiser l'édition génétique d'une œuvre littéraire ? L'exemple des Caves du Vatican.»*, *Bulletin des amis d'André Gide*, vol. XXIX, numéro 129,

janvier 2001, p. 48.

- 10) Almuth GRÉSILLON, *Éléments de critique génétique...* (*op. cit.*), pp. 136-139.
- 11) Almuth GRÉSILLON, *Éléments de critique génétique...* (*op. cit.*), p. 139.
- 12) Alain GOULET, 《Comment concevoir...》 (*op. cit.*), p. 48.
- 13) Alain GOULET, 《Comment concevoir...》 (*op. cit.*), p. 49.
- 14) 『法王庁の抜穴』の生成過程資料については, Alain GOULET, 《Comment concevoir...》 (*op. cit.*), pp. 49-51. インタビュー 1-2 頁参照。以下の紹介も同様である。
- 15) Almuth GRÉSILLON, *Éléments de critique génétique...* (*op. cit.*), pp. 113-120. グレジヨン  
は分類の方法についてまとめていて, 第一に筆跡の点から, 主な行の連続である地の文  
と行間の書き込みとでは, 地の文が先で書き込みが後になること, 第二にグラフィック  
な空間の点から, 余白の書き込みが, 別の一ページではテキストの中で発展させられて  
いるなら, この後者のページが後となること, 第三に言語のレベルで, 名詞による電信  
文のような, シナリオの文体は, テキストの形になった断片に先立つこと, 全時間の現  
在という時制は, 物語の時制を含むページに先立つこと, 第四に歴史, 文化, 科学的知  
識の点から, 作家の読書体験が別のところで確認されるなら, その体験が執筆に影響す  
ること, 第五に認知行為の点から, 読書による他作品への投影と他作品の回想がなされ  
ることなどを, 例として挙げている。
- 16) Mizuno ASAKA, 《*Les Cahiers d'André Walter et le Journal de Jeunesse — écrire les  
rêves*》 in *Gide aux miroirs. Le Roman du XX<sup>e</sup> siècle. Mélanges offerts à Alain Goulet*,  
Presses universitaires de Caen, pp. 45-50, 2002. 拙論の中で, ジッドの処女作『アンドレ・  
ワルテルの手記』の生成過程について, 彼の読書日記, 準備用ノート, 私的日記を調べ,  
相互テキスト性と精神分析の視点から研究した。ご参照を請う。
- 17) グーレが, 分散した蔵書から導き出せたかもしれない仮定については, Alain GOULET,  
《Comment concevoir...》 (*op. cit.*), pp. 51-52 を参照。
- 18) 転写については Almuth GRÉSILLON, *Éléments de critique génétique...* (*op. cit.*), pp. 121-  
131 参照。
- 19) 生成批評版には, 「読本」タイプと「研究の道具」タイプが存在する。より広い読者層  
を目指した「読本」タイプの版はその読むという目的のため, 生成過程資料が切り分けら  
れ, 一葉のフォリオのまとまりが見えず, 研究者には不十分である。「研究の道具」タイ  
プの版には, 生成過程の特定の一時期を対象とするものと, 生成の全過程を対象とする  
ものがある。特定の一時期の版は, フローベール, ヴァレリー, ゴッティの作家に適  
した, 作家の手帳, 草稿帳, 日記, プラン, シナリオを紹介するものである。生成の全  
過程の版は, 最初の草案から, 保管されている全生成過程を通して, 最後の印刷された  
テキストまで, 全生成過程資料を紹介する, 当然典型的な生成批評版である。生成批評  
版の具体例紹介は Almuth GRÉSILLON, *Éléments de critique génétique...* (*op. cit.*), pp. 188-

202 参照。以下同様。

- 20) Almuth GRÉSILLON, *Éléments de critique génétique...* (*op. cit.*), pp. 198-199.
- 21) Almuth GRÉSILLON, *Éléments de critique génétique...* (*op. cit.*), pp. 199-202. 松沢和宏が近代的草稿について言う「言葉と言葉が衝突と離反と結合を繰り返す、黒い筆跡が次第に生気を帯びてくる草稿特有の筆勢」はこのようにして皆の手に届くものになった。「近代的草稿の生誕の劇——もうひとつの歴史——」『文学』「特集 手で書かれたもの」第2巻第2号, 1991年春, 18頁。
- 22) ジェラルド・ジュネット『パランプセスト』和泉涼一訳(水声社)1995年, 20頁。
- 23) グレジヨンが物語論において、ジェラルド・ジュネットが練り上げてきた「イベルテキスト」と情報工学者たちが立脚する「ハイパーテキスト」の驚くべき一致について言及している Almuth GRÉSILLON, *Éléments de critique génétique...* (*op. cit.*), p. 199 参照。ハイパーテキストについては、内田種臣, 石田英次「ハイパーテキストの問題」『記号学研究 10 トランスフォーメーションの記号論』日本記号学会篇(東海大学出版会)1990年, 147-168頁。本論文では以下「ハイパーテキスト」のみ英語からの訳語を使い、他は「テキスト」というフランス語からの訳語を使う。
- 24) グレジヨンは他の数々の可能性について述べている。イメージや音の入力は、芝居やオペラの生成過程を解明するのに役立つ。例として、ドイツでのホフマンスタールの『薔薇の騎士』がある。次にこのように電子化されたテキストは、何よりデータの加工が容易である。コンコードダンス, 語彙統計, 削除されたり加筆されたりする語の目録など, コンピュータの機能を使ったり, 他のソフトを併用すれば容易く機能を拡張できる。Almuth GRÉSILLON, *Éléments de critique génétique...* (*op. cit.*), pp. 200-201 参照。
- 25) グレジヨンは, 6つのウィンドウ, つまり初筆, ファクシミリ, 転写, 校訂者の注釈, そこに対応する二つの推敲作業中の草稿と最終手稿を並べて見る案について書いている。Almuth GRÉSILLON, *Éléments de critique génétique...* (*op. cit.*), p. 202 参照。
- 26) Jacques ANIS, *Texte et ordinateur. L'Écriture réinventée ?*, Bruxelles, De Boeck Université, 《Méthodes en sciences humaines》, 1998, p. 171. フローベールと草稿については松沢和宏「近代的草稿の生誕の劇——もうひとつの歴史——」『文学』「特集 手で書かれたもの」第2巻第2号, 1991年春, 14-25頁参照。
- 27) Alain GOULET, 《Comment concevoir...》(*op. cit.*), p. 50.
- 28) 「原則としてこれらの資料は執筆の時期に先立つもので、『法王庁の抜穴』のある特定の一節に照合できないものである。照合できる, 執筆された草案, 初筆, 作品の一節に割り当てられるメモは, 上記の四段階のテキスト中の, 「下書き」の中の「予備執筆」に入れられた。しかしながら両者の区別は難しく, 二, 三の場合, 二つのカテゴリーに同時に置かれることとなった。」Alain GOULET, 《Comment concevoir...》(*op. cit.*), pp. 50-51.
- 29) Alain GOULET, 《Comment concevoir...》(*op. cit.*), pp. 52-53.

- 30) Alain GOULET, 《Comment concevoir...》 (*op. cit.*), p. 53.
- 31) ハイパーテキストの利点については、内田種臣, 石田英次「ハイパーテキストの問題」『記号学研究 10 トランスフォーメーションの記号論』日本記号学会篇 (東海大学出版会) 1990年, 152-153頁参照。
- 32) 「最後から最初へ先行テキストの網目を遡った後で, 反対方向に進もう。実例によって確認された最初の筆跡から, エクリチュールの動きを追おう, それから, あらゆる方向に資料を読もう。「…」視線はもはや必要な秩序を打ち立てる文節を注視するのではなく, 可能性の豊かさ, テキスト生産が取ったかもしれない, 取りかけた——それでも取らなかったあらゆる道程の複数性を証明する文節を注視するだろう。「…」最初の線状性は, 再構成される必要はあっても部分的で脱漏のあるものであり, 読者=解釈者の目の下に曲折と常に漸近的な動きに変化する。序列の分類は終わることのない過程である意味の紆余曲折に場所を譲る。」Almuth GRÉSILLON, *Éléments de critique génétique...* (*op. cit.*), pp. 139-140 参照。松沢和宏もまた, 読者が読むことで言葉の意味作用が再開されると言う。「推敲という行為は「…」言葉の出来事, 言語を言語たらしめている根源的な不在と差異が顕現してくる出来事なのであり, さらに言えば作家の推敲もまた彼が最終稿の筆を置いた後でも読まれ続けることによって転生を重ねる言葉の潜在的無限の発露に過ぎないのである。」松沢和宏『『感情教育』草稿の生成論的読解の試み——恋愛の物語と金銭の物語の間——』45頁。
- 33) Roland BARTHES, 《Notes sur André Gide et son Journal》, *Magazine littéraire*, numéro 97, février 1975, p. 26.
- 34) 森田均, 小方孝「デジタル文学理論の構想と試み」『情報処理学会研究報告』(情報処理学会) 2000年10月, p. 3。
- 35) 西垣通『思想としてのパソコン』(NTT出版) 1997年, 34-35頁。
- 36) Michel Contat, 《Les souterrains des “Caves du Vatican”》, *Le Monde [des Livres]*, vendredi 7 décembre 2001, p. III.

\*本論文は, 平成13年度松山大学特別研究助成による研究成果である。今回の執筆に際してご助力いただいた Franck Delbarre 氏, 松尾博史氏, 南学氏に, 厚くお礼申し上げます。